

8. 近世岩座神村神光寺の仁王門修復と信仰圏

渡部 凌空

はじめに

近世神光寺は檀那寺ではなかったが、岩座神地区において古くから村人たちの崇敬を集める寺院であった。同地区の五霊神社と神光寺の釣鐘の寸法について村人たちがまとめた安政3年（1856）作成の「氏神五霊大明神并氏寺両所釣鐘名并豎幅寸法書上帳」（岩座神地区文書1-108）では、五霊神社を氏神、神光寺を氏寺として記載しているように、岩座神村において氏寺と位置づけられている。本稿では、その近世神光寺について、播磨国の地誌である『播磨鑑』や2022年度フィールド調査で整理を行った岩座神地区文書を用いながら、近世神光寺の概要、仁王門修復と周辺地域とのつながりについて述べる。

1. 神光寺の概要

ここでは地誌『播磨鑑』と岩座神地区文書から神光寺の概要についてみていきたい。『播磨鑑』とは播磨国内の郡別に寺社や名所旧跡などについて記された地誌である。宝暦12年（1762）成立で、近代に入って活字本が出版された。著者は印南郡平津村（現姫路市）の平野庸脩という人物で医者や教育者として働きながら、その余暇に本書を作成したといわれている。

近世神光寺は京都仁和寺を本寺とする真言宗の寺院である。神光寺は本堂、鐘楼堂、仁王門の建築物の他に広大な山林や、1町余の田畑と境内地1町6反歩を所有しており、それぞれ年貢を免除された除地であった。神光寺の所有地についてまとめられた明治3年（1870）作成の「本末寺院其外明細帳」（岩座神地区文書2-11）には、除地の境内地1町6反歩、仏供料としての除地4反3畝4歩、さらに仁王門境内にも除地1畝3歩を有していたとある。『播磨鑑』が書かれた近世中期から近代にかけて境内地に変化は無かったが、その他の除地は減少したと推測される。また、本堂では行基作とされる十一面観音とその両側に脇土として不動明王と多門天王を祀っていた。

『播磨鑑』の「寺記略」には「往昔繁昌之砌当塔伽藍多ク、坊舎一百余宇在之」と往古の繁栄していた神光寺の様子を伝えているが、続けて「兵乱ニ悉退転ス、今者漸ク本堂〈四間／三間〉のミ在之、古之寺跡等現在也〈昔ハ／十間ニ七間也〉」とあり、戦乱をきっかけに衰退し⁽¹⁾、現在残る本堂もその規模を縮小していることが分かる。ただし、「靈宝等今に数多有之」とあるように、多くの宝物が失われずに伝えられたようである。近代に入るが、大正12年（1923）に作成された「神光寺宝物什器帳」（岩座神地区文書2-27）には、室町時代の画僧兆殿司（1351～1431）の作とされる仏画をはじめとして、他にも仏像や仏具など多くの宝物が守り伝えられたことが確認できる。

この略記の最後には岩座神村の七不思議について項目名のみ紹介されている。近世地域社会史研究

では由緒論など関わって、地域に存在する名所旧跡などが、そこで生活する人々に対して郷土意識を喚起させる機能を有したことが指摘されているが⁽²⁾、この七不思議も同様のことが指摘でき得るだろう。神光寺と関わるものでは、仁王門の側の「櫓」と後に触れる「血石」が七不思議の中に含まれており、岩座神村の住民たちが村独自の郷土意識を自覚する要素の一つとして神光寺が位置づけられていたのである。また、この郷土意識は村人達によって、あるいはこの『播磨鑑』をはじめとした編纂者を介して、村の内外へ語り継がれることで形成されてきたのだろう。

2. 近世神光寺と周辺地域とのつながり

先述したように神光寺の仁王門は岩座神村にとって郷土意識につながる重要な場であり、岩座神地区文書にも嘉永6年（1853）の仁王門修復に際して作成された文書が伝来している。「仁王門修復諸入用控帳」（岩座神地区文書2-5、以下「入用控帳」）と「仁王門修復御寄附帳」（岩座神地区文書2-8、以下「寄附帳」）である。ここではこの二つの文書の分析を通して、近世神光寺と周辺地域とのつながりについて述べたい。

「入用控帳」は岩座神の世話人茂右エ門、倉治郎他6人によって作成された文書である。主な内容は世話人や周辺地域からの酒、半紙、扇子、米、金銭の入用の覚書で、後半には周辺地域の神光寺世話人が列記されている。同時期に作成された「寄附帳」は岩座神村の神光寺世話人から南隣の多田村へ宛てた文書で、寄附を依頼した書状の写しと多田村からの寄附金についてまとめられている。

「寄附帳」では「近来甚々及大破ニ」とその深刻な状況を訴えて寄附を依頼しているが、その状況を改善するために行われた仁王門修復の具体的な内容を伝えるのが「入用控帳」の挟み込み文書「請合定書之事」である。この文書は的場村峯吉が岩座神村の役人へ送ったもので、「二王門彩色之義、（中略）二十ヶ年之間慥ニ請合申候事」とあるように、峯吉は仁王門の彩色を担当しており、今後20年間の色落修繕を保障することを約束している。また、文書の最後に「但し湿気雨漏鼠喰之義者、得請合不申候」と述べており、湿気や雨漏り、鼠食いなどは保障外とし、仁王門の破損状況が分かる。この2点の文書からは仁王門の現状以外に、修復に際し金銭の寄附や実際の作業など、周辺村からの協力体制があったこと、そしてそれを岩座神村の村役人が取り仕切っていたことが推測される。

「入用控帳」には神光寺の「御村々御世話人扣」として周辺地域の世話人が記載されている。神光寺は岩座神村の氏寺であるが、さらにその周辺地域へも広がる信仰圏を読み取ることができる。その村々の分布を示したのが図1である。岩座神村を流れる多田川と東隣の山を越えた杉原川が流れる谷筋にそれぞれ分布している。村の数は合計25か村に及び、北は山寄上村、南は山野部村まで多可郡内の南北およそ15kmにわたって存在していた。上述した「血石」は加古川流域で出た死者を神光寺に運ぶ際に、遺体を石の上に置いたという伝承に基づいている（「岩座神の七不思議」）。多田川、杉原川は加古川の支流であるため、この伝承と信仰圏はおおよそ一致していると考えられ、今回「入用帳」から推測した範囲よりもさらに大きな信仰圏であった可能性がある⁽³⁾。本稿では「入用控

帳」から読み取れる神光寺世話人のみ扱っているため、より正確に信仰圏を把握するにはさらなる検討が必要だが、少なくとも嘉永6年の修復に関しては、この領域内で神光寺への協力体制があったと捉えることができるだろう。

おわりに

以上本稿では近世岩座神村神光寺について、地誌『播磨鑑』や岩座神地区文書の分析を通じて特にその概要と他地域とのつながりについて分析した。近世神光寺は岩座神村の氏寺であるとともに、地域独自の郷土意識を喚起させる重要な場であった。また、同じ多可郡清水村において、往古から無住の西宮大明神宮光明院へ村中が相談の上、神光寺の住職が兼帯することになったと述べられており（加美町1984：212-213）、周辺地域と神光寺のつながりとは双方向的なものであったといえる。本稿では十分に検討することはできなかったが、近世神光寺を捉えるには村外からの相対的な視点も必要である。

註

- (1) 『多可郡誌』には元亀天正年間の戦乱で廃退したとある。（兵庫県多可郡教育会 1923：253）
- (2) 岩橋は、「村方旧記」と総称する村の歴史を記した文書の分析を通じて地域社会における歴史意識や郷土意識について明らかにしている。（岩橋 1993、2010）
- (3) 『西脇市史』では、この伝承は多可郡を越えて加東郡滝野町あたりまで広まっており、南北で6から7里に及ぶとされている。（西脇市 1983：302-303）

参考文献

- 平野庸修 1909 『播磨鑑』 播磨史談会
- 岩橋清美 1993 「近世後期における歴史意識の形成過程」『関東近世史研究』 34号
- 岩橋清美 2010 『近世後期の歴史意識と情報空間』 名著出版
- 加美町 1984 『加美町史』 史料編
- 西脇市 1983 『西脇市史』 本編
- 兵庫県多可郡教育会 1923 『多可郡誌』
- 「岩座神の七不思議」 <https://isarigami.net/isarigami/articles/wonder.html>（2023/08/07 閲覧）
- 「岩座神ネット」 <https://isarigami.net/>（2023/08/07 閲覧）
- 「国書データベース」 <https://kokusho.nijl.ac.jp/biblio/100135375/496?ln=ja>（2023/08/07 閲覧）
- 「国土地理院ウェブサイト」 <https://maps.gsi.go.jp/#12/35.148126/134.957085/&base=pale&ls=pale&disp=1&vs=c1g1j0h0k0l0u0t0z0r0s0m0f0>（2023/08/07 閲覧）

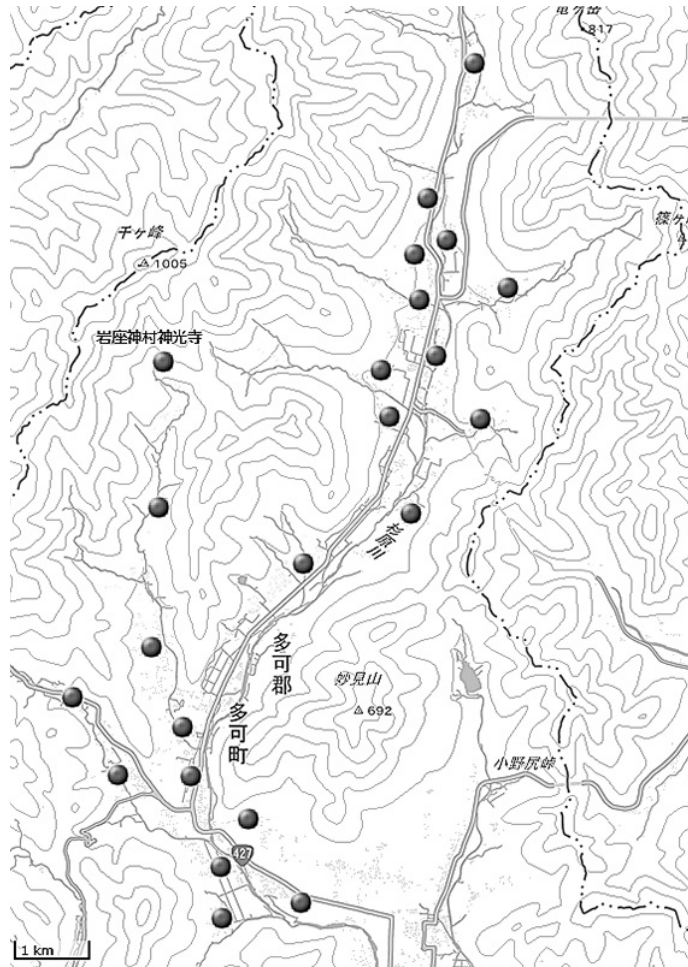


図1 神光寺世話人居住村の分布
(国土地理院地図をもとに加筆)

編集後記

歴史学科2年次の学生を対象に「文化遺産学フィールド実習」の授業を設け、長年にわたって基礎的な調査を実践する場として活用してきた。これまで、数多くの市町でお世話になり、夏休みを中心にフィールドワークをおこない、そのそれぞれの取り組みについては、その後の調査などを経て、単発で報告などにとりまとめてきた。今回、兵庫県多可郡多可町で分野横断的な調査をおこなうことができ、また科研のテーマである山寺研究を裨益する研究成果がまとまったため、本書を編むことになった。多大なご援助をいただいたみなさまに改めて謝意を表したい。(ひ)

表紙・裏表紙写真

上左：五霊神社の調査風景（菱田哲郎撮影）

上中：旧神光寺跡の調査風景（菱田哲郎撮影）

上右：岩座神地区文書の調査風景（東昇撮影）

下：岩座神地区の棚田景観（安平勝利撮影）

裏表紙：神光寺仁王門と千ヶ峰（岸泰子撮影）



京都府立大学文化遺産叢書 第29集

播磨神光寺と岩座神地区の文化遺産

編集 菱田 哲郎（京都府立大学文学部教授）
岸 泰子（京都府立大学文学部准教授）
発行 京都府立大学文学部歴史学科
〒606-8522 京都市左京区下鴨半木町 1-5
発行日 2024年3月29日
印刷 株式会社 北斗プリント社
〒606-8540 京都市左京区下鴨高木町 38-2